

形容詞の機能 : 日本語教育ノート1

EMURA, Hirofumi / 江村, 裕文

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 : journal of intercultural communication : ibunka

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

132

(終了ページ / End Page)

140

(発行年 / Year)

2004-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002104>

形容詞の機能 —— 日本語教育ノート1 ——

江村裕文

0. はじめに

Leech (1983) は、Pragmatics 「語用論」における対人関係的修辭において Grice (1975) を援用し、「協調の原理」「丁寧さの原理」の他にも「関心の原理」「ポリアンナの原理」をたてている①。ここでは、この「丁寧さの原理」の中の「交話的原則」、すなわち Malinowski (1923) の“phatic communion” ②を手掛かりに、コミュニケーション場面における形容詞の機能について考えてみたい。

1. 日本語教育における「文型」と教師の役割について

一般に多くの日本語教育機関においては「文型」中心として知られるシラバスを柱とした教育が行われている。その反映として、このシラバスにもとづいて制作された教科書が多く見られる。特に初級の場合、「文型中心シラバス」の教科書によると、大雑把に言って「名詞文」→「形容詞文」→「動詞文」という順に文型が提示されていることが多い。これはもちろん構造的により簡単なものからより複雑なものへという、学習の便宜を考えてのことである。

さてここで取り上げたいのは、形容詞の使用されている文型である。日本語の教科書の中では形容詞の使用されている文型は、一般にかなり初期に取り扱われている。例えば『日本語教科書ガイド』によると、形容詞は以下のような課で扱われている③。

教科書名	扱っている課	文型
日本語の基礎	第8課	NはAいです・AいN
Japanese Conversation	第10課	NはAいです・AいのはNです
正しい日本語	第12課	AいN・AいのはN
Easy Japanese	第6課	Aいです・AいN
日本語入門	第2課	AいN
東外大 日本語 I	第5課	NはAです
国際学友会 日本語 I	第5課	AいN
長沼 Basic Jap. Course	第2課	NはAいNです
I.C.U. Modern Japanese	第2課	AいN
早稲田 教科書初級	第3課	NはAです
An Intro. to Modern J.	第2課	あのAいNです
あたらしい日本語	第2課	AいN
日本語初歩	第5課	AいN

このリストを一瞥すると、教科書により、主語の名詞の述語として形容詞が扱われている場合もあれば、名詞に対する修飾語として形容詞が扱われている場合もみうけられる。では、これらの教科書の中で形容詞の使用されている文型は、実際にどういう実例の形で提示されているのであろうか。いくつかの教科書を例にとってみる（ここでは取りあえずいわゆる「イ形容詞」の部分だけを抜き書きする）。

【日本語の基礎】第8課の「文型」

これは大きいかばんです。

これは大きいです。

これは大きくないです。（大きくありません。）④

【日本語入門】第2課「To MODIFY Things」

たかいやまとながいかわ

わたしのあたらしいじどうしゃ⑤

【あたらしい日本語】第2課の「Presentation」

これは大きい工場ですね。

あの工場は小さいですね。

あまり大きくないです。

このタイヤは強いですか。はい、強いです。

あの古いれんがの建物はなんですか。

新しい劇場ですか。いいえ、あまり新しくないです。

海にも山にも近いです。⑥

【日本語初歩】第5課の「本文」

あおいりんごもあかいらんごもあります。

あおいりんごはいくつありますか。⑦

形容詞の使用されている文型について見ると、いずれの教科書を見ても、提供されているのは、形容詞が述語として文末に来る場合も、あるいは名詞を修飾する場合にも、「イ形容詞」であれ「ナ形容詞」であれその原型のままでもいい、という形容詞の形に関する情報だけである。

形容詞というのは事物の性質や状態などを表現する品詞であるということになっている⑧。とすれば、事物の形状や性質を述べたいときには形容詞を使えばいいということは、確かにわかる。しかし、それだけでは、日本語の母語話者が、どういうときに、あるいはどういう場面で事物の形状や性質を表現するのかはわからないし、学習者の側も、どういうときに、あるいはどういう場面で、さらに、どういう相手に対して、どういう意図のときに、形容詞を使えばいいのかわからないのが当然ではないか。

日本語教師の役割は、文の構造を学習者に理解させ、その文を生成できる能力を養成するということだけにとどまらず、実際にそうして生成した文を適当な場面で適当な相手に対して適当なコンテキストで使用することができるというところまで訓練するというものはずである。もしそうでなければ、学習者は日本語という langue についての、つまり構造についての知識を得ることはできても、それをどこでどう使ったらいいのか皆目見当がつかないという状態におちいるはずである。ある文が作れば自然にそ

れが使えるようになるはずだという考え方を支えているのは、その文が使用できる場面や相手が、日本語においても学習者の母語においても全く同じはずだという、ちょっと考えにくい、というか、全く現実離れた前提であることになる。日本語の構造だけを教えるのが教師の役目だと考える教師がいるとしたら、その人は日本語の構造を知ることが目的であるような学習者にとってのみいい先生ということになるだろう。

コミュニケーションのためにという目的を前面に押し出すとしたら、ここで例としてあげた形容詞の使用されている文型についても、その文型の生成の仕方（つまり文法）だけでなくこの文型が現実の場面で担うであろう機能をより効率のよい方法で学習者に教え、その使い方を訓練するために、例えば「語用論」的にその文型の機能を把握しておく必要がある。ところが、その情報を教科書によって得ようとしても、上に見たように、現実にはどの教科書もこの点については何の情報ももたらしてくれないのである。

例えば『日本語の基礎』で扱われているような「これは大きいかばんです」という文が実際に発話されるような場面を考えてみよう。この文に対しては「だからどうしたの」としか答えられないのではないだろうか。それは『日本語入門』の場合でも同様である。これに対して『あたらしい日本語』の場合はかなり普通にあり得る会話になるような工夫がされている。「これは大きい工場ですね。なんの工場ですか」という問いかけに対して「この工場は自動車の工場です」と答えるというような対話になっているからである。1987年に改訂版が出た『日本語初歩』の場合はさらに自然さを増すように工夫がこらされている。

2. 形容詞の使用されている文型の言語使用上の機能について

ここでは、形容詞の使用されている文型の使用上の機能とでもいうようなものを『語用論』的に模索してみたいが、実はそのヒントはすでに上にあげたいいくつかの文例に現れている。

- これは大きい工場ですね。なんの工場ですか。
□ この工場は自動車の工場です。

というやりとりに不自然さが見られないのは、「これは大きい工場ですね」という文が（「語用論」的に）ふさわしい使われ方をしているからであると考えられる。つまりこの文は単純に「この工場が大きいこと」を指摘しているのではなく、「この工場が大きい」ことに対する自分のいわば驚きの気持ちを伝え、「この工場に私は興味がある」ということを示すことで「なんの工場ですか」という質問の前置きとし、「これからこの工場をトピックにしますよ」という合図を相手に伝えていられる。だから「これは大きいかばんです」というような、見たらすぐにわかるような、情報伝達上なら存在価値が見出せないような状況をわざわざ述べあげているような文は、「だからそれがどうした」としか言いようのない、コミュニケーション上の価値を持たない文としか感じられないのである。例えばこれが「これは大きいかばんですね」というような、相手に同意を求めるような形で現れているとしたら、まだしも存在価値があるだろう。つまり「私はこのかばんをトピックにしてみたいのですが、このかばんはあなたの興味を引きますか」といった意味をそこに見出すことができるようになるからである。

とすれば、形容詞の使用されている文型の機能は、その文の中に情報伝達上の重要な意味があるのではなく、そこに続いて話者がトピックとしたものを提供し、「私はこれに興味があるのですが、あなたはどうか」という意味を含ませ、さらに、例えばここであげた二つの文の場合は「その大きさ」にこそ自分の興味があるという言い方で、次の話題への転換を図るといのがこの文型の発話上の機能といえるのではないだろうか。

これに類した用法で「そのネクタイ、きれいな色ですね」とか「珍しいイヤリングですね」とかといったように、特に形容詞を用いて相手の持ち物に対して、褒めたりプラスの評価をして話題にするということがある。これも「私はあなたの持ち物を話題にしようと思います」という意味で、上と並行した用法であろう。問題は、その持ち物を話題にすることが話者

にとってそれほど重要ではないということである。例えば値段を聞くとか、産地はどこかといったようなことを情報として得たいからという理由でそれを話題にするということは、実際のコミュニケーションの場面ではかえって少ないのではないと思われる。相手の持ち物、例えばネクタイなりイヤリングなりを話題にすることで新しい情報を得るのではないとすれば、それは話題にしたものに関する情報交換以外の機能をこの文型が持っているということを示していることになる。

3. 「丁寧さの原理」の「交話的原則」との関係

冒頭に引用した Malinowski (1923) は“phatic communion”という術語を提案した当人であるが、少々長い引用になるが、以下にその間の事情を述べた部分を紹介しておきたい。⑨

言語が、自由に目的もなく、ただ漫然と社交用にもちいられる場合は、特別の考察を必要とする。(中略)

単なる儀礼のために、もちいられる語句があつて、それはその言葉の意味とは無関係な役目を務める。健康をたずねること、天候の挨拶、まったく分かり切った事柄をいうこと——こんなことが、あることを知らせるためでもなく、またこの場合には、ある活動に人を結束させるためでもなく、思想を表現するためではなおさらなくして、ただ漫然と取り交わされる。かような言葉は共通の情操を起こすに役立つ、といってさえ至当でないわたしは思う。というわけは、普通このような通り一遍の挨拶の言葉には共通の情操等というものは含まれていないからである。(中略)とすれば、「ご機嫌いかがですか」、「お故郷はどちらですか」、「結構なお天気です」のような語句——それらはある社会の挨拶、または近づきのきまり文句である——の存在理由は何かであろうか。

単なる愛想としての言語の機能を論ずるとき、われわれは社会における人間の性質の根本的な様相に触れるようにわたしは思う。すべての人間には、集合し、一緒になり、同居を楽しむ傾向のあることは周知の事実である。(中略)

さて、言語はこの傾向と密接に関係がある。けだし、自然人にとっては、他人が口を緘して語らないということは不安の種である。(中略)沈黙を破ること、すなわち言葉の交換は交友関係をつくる第一歩であり、それはパンを割り、食を分かつことによって、はじめて完成する。(中略)

疑いもなく、ここにわれわれは、言語用法の新しい型——術語創造の悪魔に駆られて、わたしはそれを言語交際 (phatic communion) と呼びたい——連合の紐がただ言葉を交えることによって創造される言語の型に逢着する。(中略)言語交際における言葉は、意味、つまり象徴的にその言葉に属する意味を伝えるために、本来使われるのであるか。決してそうではない。それは社会的機能を果たすものである。そしてそれが主要な目的である。

これに関連して、Leech (1983) は「丁寧さの原理」の中の「交話的原理」について次のように説明している。⑩

いくぶん些細なレベルで天気のようなごくありふれた話題を議論したり、それほど些細ではないが、You've had your hair cut! (髪を刈ってもらいましたね) のような情報量のない陳述が生ずる理由を説明するのは、さもないとコミュニケーションから脱落するという意味を含めての、沈黙回避の必要性なのである。

形容詞が使用される文型は、ある場合には、ここで Leech が述べているような機能を担っていると考えていいのではないだろうか。つまり「私はあなたとコミュニケーション関係を保っていたい。しかし具体的に何を話題にしたらいいかわからない。それで恐らくあなたもそれを話題にしたら私との会話が弾むような話題として、私の目についたあなたの持ち物を話題にしようと思うのですが、どうですか」という意味で、相手の持ち物に対してプラスの評価の形容詞を用いた文を使うというわけである。こう考えれば、見ればわかる形状をわざわざ描写するという形容詞を、文中で使う理由が説明できるわけである。

以上、日本語教育の現場においては、形容詞の「文法」的な側面だけで

はなく、「語用論」的な側面からも、学習者に対して情報提供がなされなければならないという主張を述べた。

ただ、急いでつけくわえておかなければいけないのだが、ここで述べていることは、実際のコミュニケーション場面における言語使用に使用される形容詞の機能が、上に述べたような機能であると限定的に指摘しているわけではないということである。ここで指摘したのは、見ればわかるような形状を表す形容詞に関して、その「語用論」的な機能としてトピック導入という機能が指摘できるということだけである。だから、他にも様々な機能を果たしているであろう可能性について否定しているわけではない。またさらに、「おいしい」や「寒い」といった、形状を表す形容詞以外の形容詞の機能の問題は、別途考察すべき課題である。

注

- ① Leech, G.N. (1983) "Principle of Pragmatics" 但しここでは池上嘉彦・河上誓作訳『語用論』(1987) 紀伊國屋書店による。218ページの表6.1。
- Grice, H.P. (1975) 'Logic and conversation' in Cole and Morgan (eds.) (1975) *Syntax and Semantics: Vol.3, Speech Acts*, 41-58, Academic Press.
- ② Malinowski, B.K. (1923) "The problem of meaning in primitive languages", Supplement I to *The meaning of meaning* by Ogden, C.K., and Richard, I.A., International library of psychology and scientific method, London. 但しここでは石橋幸太郎訳『意味の意味』(1967) 新泉社による。
- ③ 国際交流基金編『日本語教科書ガイド』(北星堂 1983) 16ページ以下
- ④ 海外技術者研修協会(1974)『日本語の基礎』海外技術者研修調査会
- ⑤ 吉田弥寿夫他(1976)『日本語入門』学習研究社
- ⑥ 吉田弥寿夫他(1973)『あたらしい日本語』学習研究社
- ⑦ 鈴木忍他(1987)『日本語初歩』国際交流基金
- ⑧ たとえば、『言語学大辞典』第6巻術語編(1996)三省堂の「形容詞」の項目には、「いかなる言語にも名詞と動詞の二大語群のほかに、物

の性質や状態などを表す実辞の一群がある。」と記されている。(p.350)

⑨ Malinowski (1923) 邦訳 404-406ページ

⑩ Leech (1983) 邦訳 206ページ